

妙輪寺 信行要典

ご自由にお持ち帰りください

● 妙輪寺縁起	一頁	● 妙法蓮華經如来寿量品第十六・二十八頁
● 宗祖日蓮聖人について	二頁	● 妙法蓮華經如来神力品第二十一・三十二頁
● 開山日輪聖人について	三頁	● 五番神咒
● 二世日向聖人について	四頁	● 普賢咒
● 近代の歴代住職	五頁	● 宝塔偈
● 妙輪寺の寺宝等	六頁	● 観心本尊抄(御妙判)
● 法華經の教え	七頁	● 報恩抄(御妙判)
● 日蓮宗の法要	八頁	● おつとめ回向文
● 日蓮宗の声明	十頁	● 追善供養回向文
● 道場偈(声明)	十一頁	● 回向伽陀(声明)
● 三宝礼(声明)	十二頁	● 祈願文
● 切散華(声明)	十三頁	● 四弘誓願(四誓)
● 勸讀	十四頁	● 奉送(声明)
● 開經偈	十六頁	● 妙輪寺三二法話集
● 妙法蓮華經方便品第二	十八頁	● 守護神占い
● 妙法蓮華經提婆達多品第十二・二十一頁		

妙輪寺 縁起

延文元年(一三五六年)、この地にあった真言宗の寺は鎌倉比ヶ谷妙本寺・池上本門寺の三世である大教阿闍梨 日輪聖人と宗義について語り合い、ついに教えに帰依して日蓮宗へと改め、寺を聖人に献上しました。

翌・延文二年(一三五七年)、日輪聖人は現在の場所へ移り、四月に開堂して説法を行い、山号を福聚山、寺名を妙輪寺と定めました。以来当山は永聖跡の寺格をいただき今日に至るまで法灯を受け継いでいます。

日輪聖人の母は妙朗尼、その父は印東領主・印東次郎左衛門尉 藤原祐照、公は工藤祐経の娘と伝えられます。

当山の「日蓮聖人像」は天然痘の身代わり守護として信仰を集め、今も病氣平癒の祈願で多くの方が参詣されます。徳川の頃には紀州家の姫君がたびたび逗留し、江戸城の奥女中の参詣も多かったと伝わります。

天保七年(一八三六年)には、北下横丁大工・半七の火元により大火が起こり、宿内の多くが焼失、当山も十一寺とともに罹災しました。その後は仮の堂でしのぎ、明治末に現在の本堂が再建されました。

古文書や仏像の一部は災を免れなかでも二世・日向(当時の真言寺主)に授けられた「開山日輪聖人真筆の曼荼羅」が現存し、また「日輪聖人像(徳川中期に池上本門寺宝蔵より移したものの)」も大切に守られています。

境内の「熊王稻荷」は、大磯宿の商売繁盛を見守る守護神として伝わり地域の方々に親しまれてきました。海に近いこの地で、人びとの願いに寄り添いながら、妙輪寺はこれからも静かに祈りを重ねてまいります。

にちれん だいしようにん

日蓮大聖人

(一二二二〜一二八二)

日蓮宗宗祖・末法有縁の大導師



日蓮聖人は鎌倉幕府中期の僧で、日蓮宗を開いた僧侶です。日蓮聖人は承久四年に安房国小湊（現在の千葉県鴨川市）に生まれました。

比叡山や高野山などで修行を重ね、法華経こそ

仏教の核心だという確信を持ち、建長五年に政治不安や天災に苦しむ世を救おうと鎌倉に来ました。

当時の鎌倉は禅宗や念仏宗の信者が多く、日蓮聖人は松葉ヶ谷に草庵を結び、町の辻に立って強く説きました（辻説法）。とくに著書『立正安国論』では、誤った教えに流される世間と、それを容認する幕府を厳しく批判しました。

にちりん しょうにん

日輪聖人

(一二七二〜一三五九)

妙輪寺開創・日蓮大聖人の孫弟子



池上・比企の両山三世で、大経阿闍梨日輪聖人とよばれます。日蓮宗の高僧「九老僧」の一人で、文永九年（一二七二）に下総国葛飾郡風早庄平賀郷に生まれました。兄は同じく九老僧の日像です。

日像は文永十二年、七歳で日朗に入門し、身延にのぼって日蓮聖人に仕えました。五歳の弟・日輪も父とともに身延を訪ね、兄の懸命な給仕を見て出家を志したと伝わります。弘安七年（一二八八）、日像が日朗のもとで剃髪得度すると、同席した日輪は深く感じ入り、その日のうちに日朗へ入門しました。

日蓮聖人はこの論を幕府の実力者北条時頼に提出しましたが、黙殺され念仏者の反発を招いて草庵を焼き討ちに遭います。日蓮聖人は伊豆へ流されましたが、のちに許され鎌倉へ戻りました。

2
当時は元（モンゴル）の侵攻が迫り、日蓮聖人の『立正安国論』の予言が的中しました。

文永八年には再び同論を幕府に差し出したことから、執権北条時宗により処刑寸前となりますが難を逃れ、佐渡へ流されます。三年後に身延山へ入り最後の九年間をそこで過ごし、法華経を末法の長い未来へ伝える人材育成に力を尽くしました。日蓮聖人はどのような弾圧にも屈せず、権力に迎合せず、終生民衆のために戦い抜いた法華経の行者です。

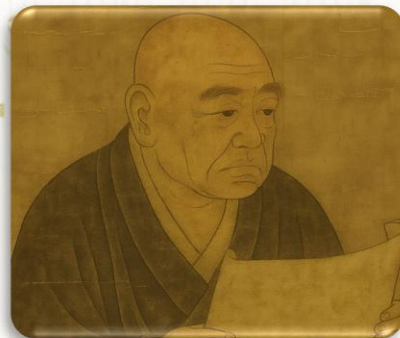
文保二年、日輪は日朗から鎌倉比ヶ谷妙本寺と池上本門寺の両山貫首を任せられます。朗門九鳳の俊英の中で最年少ながら後継に指名されたのは、日朗との縁や名門・平賀氏の出自もあったでしょうが、なにより智徳と修行を兼ね備えた名僧へ成長していたからだと考えます。就任後も学問研鑽と教化に大きな足跡を残しました。

延文元年、現在の大磯町の真言寺主は日輪聖人と宗義を論じ、ついに帰依して寺を献上して改宗しました。翌・延文二年（一三五七）、聖人は当地に移り四月に開堂して説法し、山号を福聚山寺名を妙輪寺と定め、永聖跡の寺格を得て今日に及びます。

妙輪寺本堂に安置する日輪聖人筆の大曼荼羅本尊は、聖人開創の寺々の中で本尊を今に伝える唯一のものです。

日向聖人

妙輪寺第二代目・元真言僧



妙輪寺第二代の住職日向上人。もとは大磯の現在地にあつた真言宗寺院の住職で、護摩加持祈禱など密教的な修法に卓抜した行者であつたと語り継がれます。ただし、妙輪寺が真言宗であつた時代の公的記録はほとんど残っておらず、具体的な年譜や活動の詳録は伝来していません。

延文二年（一三五七）、日蓮宗の高僧日輪聖人が来山し、法論を申し入れました。両師は論じ合い、最終的に日向聖人は日輪聖人の説に信順し、寺を献上したうえで自らも日蓮宗へ改宗して弟子となりました。

形式上は日輪聖人が初代、日向聖人が二代ですが、日輪聖人は池上本門寺・鎌倉妙本寺の両山貫首を兼ねており実際に寺務を統べて地域の教化と祈禱を担ったのは日向聖人でした。したがって当山の実質的な初代住職とも言えます。

改宗後の日向聖人は真言密教で培った修法と、法華経の教えを折り重ね、人の一宿命を読み解き導く秘術「輪命術」をまとめ上げたと伝われます。当時は宗派4間の垣根が高く、他宗の要素を公に取り入れることは厳しく戒められていました。そのため輪命術は門外不出の秘伝とされ、歴代住職のみに密やかに継承されました。

のちの世に至っても、妙輪寺が開運寺として人々の安寧と開運を祈る姿勢を守り続けてこられた背景には、日向聖人が実務を担いながら築いた教化・祈願の体制と、修法と教義を融通無碍に結び合わせる着想があつたと考えられます。



慈海院日樹上人

（熊澤繁樹上人）

妙輪寺第六十八代目

東京都庁勤務の折、本山龍口寺貫首でもあつた上司に師事して出家。東京都庁の要職と妙輪寺住職の二足の草鞋で効みのち四十四年間住職を務めた。神奈川県第三部の宗会議員・宗務所長など要職を歴任し、宗門にも尽力した。

慈教院日森上人

（熊澤海樹上人）

妙輪寺第六十九代目



「ヒゲの上人」と親しまれた日森上人は在家出身ながら熊澤の名を継ぎ、日樹上人のもとで出家。長年、国際布教師として海外で奉職し日樹上人の遷化により帰国して妙輪寺第六十九世に就任。天成会館、永代供養墓、ペット墓を創設。



慈療院日吏上人

（熊澤吏樹上人）

妙輪寺七十代目

国際布教に尽くした父・日森上人のもと海外で育つ。医療従事者として各国で勤めた後、父の遷化を受け妙輪寺を継承。住職と医療の二足の草鞋で仏道で心を、医道で体を癒す僧侶となる。日蓮宗声明師として国内外の僧侶を教育する。



日輪聖人筆 曼荼羅本尊 延文二年（一三五七）

本尊は八十六歳の日輪聖人が第二世日向上人へ授与したものです。前年に両師の教化で当山が開創されたと伝わります。常住本尊として染筆と推測され創建を裏付ける史料です。諸尊は大坊本行寺蔵と同一で開創寺で本尊が伝わるのは妙輪寺のみです。日輪聖人は多くの寺を開創しましたが自筆の本尊が現存し伝わるのは当山だけです。

法華経の教え

仏教のエッセンスが詰まった
人生の良薬―法華経

お経はしばしば「八万四千」とたとえられるほど多いといわれますが、そのエッセンスを一冊に凝縮した“総合ガイド”こそが『**妙法蓮華経（法華経）**』です。法華経はお釈迦様の本心を明らかにし、あらゆる人が等しく仏の境地へ至れるという大胆なビジョンを示します。難しい理屈よりも「今をより良く生きるための設計図」として読むとぐっと身近に感じられます。

たとえば法華経の有名な比喻（例え話）では燃えさかる家から子どもを救うために父が工夫する「**三車火宅**」、自己価値を忘れた人が本来の力を取り戻していく「**長者窮子**」等があり私たちの日常の迷い・不安・自己否定を優しく解きほぐします。法華経は「**あなたにも本来の尊さ（仏性）がある**」というメッセージを何度も繰り返し諦めかけた心に火を灯します。

伝教大師最澄ご自作 寺宝 大磯開運毘沙門天像

妙輪寺の毘沙門天像は、日本仏教の祖である伝教大師最澄ご自作と伝わる木立像です。妙輪寺第四十九世・日壽上人が年来この像を信敬してきた師・日量上人から譲り受け、当山へ入寺の折に持参したと伝えます。以来、大磯宿の商売繁盛を守る「大磯開運毘沙門天」として今日に至るまで篤く信仰されており



最上稲荷勧請

妙輪寺境内の熊王稲荷堂は鎌倉安国論寺に祀られる熊王大善神を分祀したものです。名は、稲荷信仰に篤かった宗祖日蓮大聖人の従者熊王丸に由来します。熊王稲荷の本体は岡山の最上稲荷で祀る最上位経王大菩薩です。妙輪寺は日本三大稲荷である最上稲荷の別院としてそのご利益を広め、日々稲荷祈願を奉修しています。



歴史的にも魅力は際立ちます。聖徳太子が早くから注目し、中国では智顗が天台宗を開き日本では最澄がその灯を継ぎました。日蓮聖人は、法華経こそ末法の混迷を生きる人々を救う最勝の教えと捉え「**南無妙法蓮華経**」と題目を唱えるシンプルな実践に落とし込みました。

法華経は**全二十八品（章）**から成り法要では趣旨に合わせて一部を読みます。なかでも「**如来寿量品第十六**」は必読の核心です。そこで示されるのは、お釈迦様は今も導き続ける“久遠のいのち”であるという視点。私たちは見えないうちで常に導かれている。この視座が日々の不安をやわらげ、仕事や人間関係の選択にも深い安心感をもたらします。

学問として読んでも面白く、実践書として用いても役に立つ。法華経は知と信と行を一冊に統合した時代を超えるライフハンドブックです。



日蓮宗の法要

法要の流れは？ 意味は？

日蓮宗の法要の基本的な構成は

〔声明〕

〔読経〕

〔唱題〕

から成ります。

〔声明〕

お経に節をつけた仏教音楽の一つ。まるで歌のようにお唱えします。特に法要の最初と最後にお唱えします。

〔読経〕

妙法蓮華経の二十八章の中から、その法要の趣旨に合わせ、お経を選び読み上げます。

〔唱題〕

お題目である南無妙法蓮華経を何度もお唱えします。合掌して心を込めてお唱えしましょう。

〔道場偈〕

この道場（本堂）に仏様が姿を現してくださることを念じ歌う声明。

〔勧請〕

仏様がいつでもこの世におられて人々を教え導いて下さるようお願いする願文。勧請は導師が独唱する。

〔開経偈〕

お経を読む前に拝読する偈文。法華経に出会えた奇跡と喜びを表す。

〔読経〕

法要の趣旨に合わせ法華経二十八章からお経を選び読経する。方便品第二と寿量品第十六はどの法要でも読み上げる。神力品第二十一は男性の仏様、提婆品第十二は女性や動物の仏様のご供養で読み上げる。

〔祖訓〕

法要の趣旨に合わせて日蓮聖人のご遺文の一節を選び拝読する。

法要の式次第の例

一、	道場偈	十一頁
一、	勧請	十四頁
一、	開経偈	十六頁
一、	読経	十八〜三十九頁
一、	祖訓	四十頁
一、	唱題	
一、	宝塔偈	三十九頁
一、	回向	四十四頁
一、	祈願	三十六頁
一、	四弘誓願	三十七頁
一、	奉送	四十八頁

〔唱題〕

「南無妙法蓮華経」と繰り返しお唱えする日蓮宗で最も大切な修行。

〔宝塔偈〕

「見宝塔品第十一」の偈文。法華経を信仰するのは難しいが、信仰する事によって諸天善神が褒め給われる事を説く。

〔回向〕

法華経の功德を、ご供養している仏様のために「回し向ける」こと。導師独唱。

〔祈願〕

参拝された檀信徒のために身体健全、家内安全、開運除災等の御祈願をする。

〔四弘誓願（四誓）〕

人々を救う、道を求める等の四つの誓いを唱える。

〔奉送〕

諸仏諸尊をお送りする声明。

日蓮宗の声明

声明は、読経や礼拝と一体で行う「声による供養」です。日蓮宗では、法要の冒頭・中程・結びにふさわしい曲節を配し声で場を清め、仏の法悦を捧げます。なかでも実践の基本は出だしの合わせ方で、一般的に男性は双調（そうじょう）Ⅱソ（Ⅱ）（Ⅱ）（Ⅱ）女性は毛越（いちこつ）Ⅱレ（Ⅱ）（Ⅱ）（Ⅱ）で歌い始めます。両者が重なりと純正に響き、和音として美しく調和します。

音の基礎にあるのが「十二律」です。宮・商・角・徴・羽と名づけられた十二の基準音から成り、中国古来の三分損益法に由来する音体系で、日本の雅楽・声明に広く用いられてきました。

日蓮宗の声明は天台声明の強い影響を受けて展開してきました。各宗の祖師が比叡山で学んだ経緯もあり、後世の宗派声明にも天台由来の型が色濃く残っています。

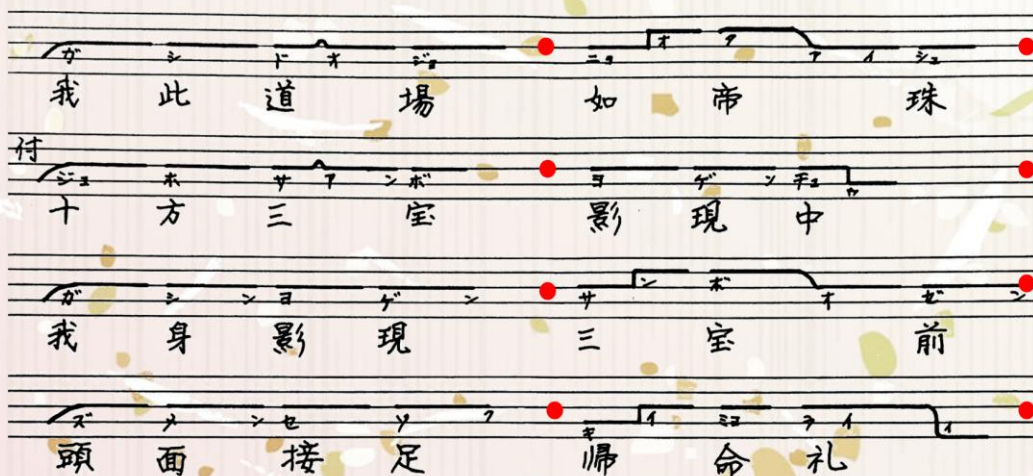
どうじょうげ 道場偈

音声を聞く



頭 面 攝 足 歸 命 禮
我 身 影 現 三 寶 前
付 十 方 三 寶 影 現 中
我 此 道 場 如 帝 珠

「道場偈」は法要冒頭に仏・法・僧を本堂へ招く声明です。文意は「この道場は帝釈天の宮殿を覆った網糸の結び目にちりばめた宝玉のごとく。仏・法・僧は、あらゆる方向に、宝玉の光のように、お互いに光を発し、影を映しあっています。私の身体は、その仏・法・僧の現れた影の前に置き私の頭を仏さまの足に付けて、五体倒地・頂足して帰依を誓います」と願い上げること。



現在、日蓮宗は声明の技術を統一し「宗定声明」として七曲（道場偈・三宝礼・切散華・咒讃・対揚・三帰・奉送）を定め、法要の趣旨に合わせて歌い分けられます。声明の出だしから「付」までは「金座」と呼ばれる法要のリーダーが独唱します。声明の出だしは、低い音程から徐々に上げる「押し出し」という方法で唱えます。文字の横にある線（墨譜）は音の上げ下げを表します。

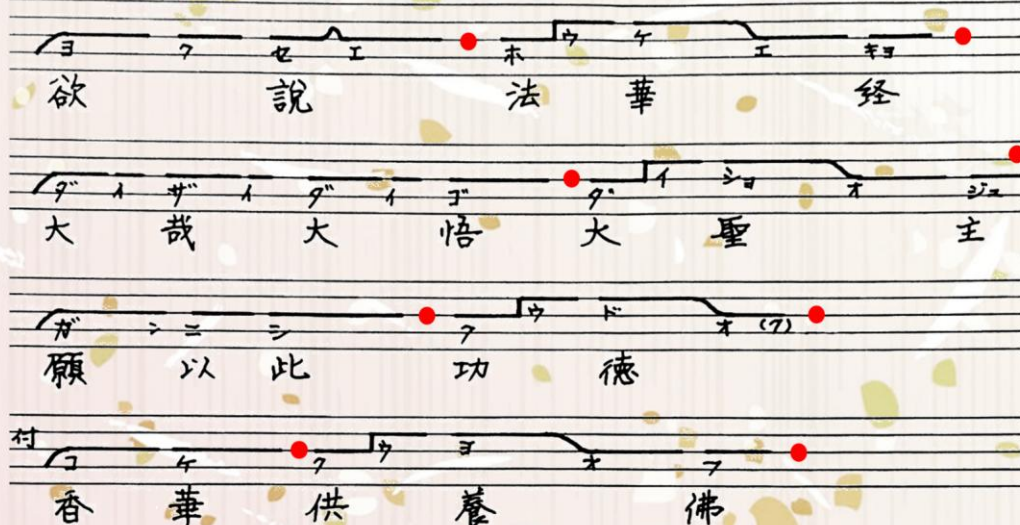
- （スグ）音を上下せずにまっすぐ音を出す
- （ユリ）音を揺らすように瞬時に上下する
- 低い音から直ぐに高い音へ移る
- （エンバイ）なめらかに音を下げる
- 音をなめらかに低音まで下げる
- 息継ぎ
- 付 引金が鳴り全員で唄い始める
- 拝 引金が鳴り礼拝のための所作を行う

付 香 願 付 香 大 香 欲 切
 こ ー がん ー こ ー だい ー こ ー よく ー きりさんげ
 華 ー に 以 ー け 華 ー さい 哉 ー せ 説 ー 散
 け ー ー し 此 ー け 華 ー だい 大 ー ほ 法 ー 華
 く 供 ー 功 ー く 供 ー だい 悟 ー け 華 ー へ
 よ 養 ー 徳 ー よ 養 ー だい 大 ー き 華 ー 経 ー
 ぶ 佛 ー と 徳 ー ぶ 佛 ー しょう 聖 ー 主 ー
 ぶ 佛 ー ぶ 佛 ー ぶ 佛 ー ぶ 佛 ー

音声を聞く



「切散華」は、道場にお迎えしたお釈迦さまへ華葩(ケハ・花)を供養する声明です。文意は「釈尊が法華経をこれから説こうと欲されています。仏に華を供養しましょう。大なるかな。釈尊が完全円満な悟りを開かれました。仏に華を供養しましょう。願わくは法華経の功德をもって。仏に香華を供養しましょう。」という願いを表します。撒かれた花は加護のしるしとして、お守りにお持ち帰りください。



三寶礼

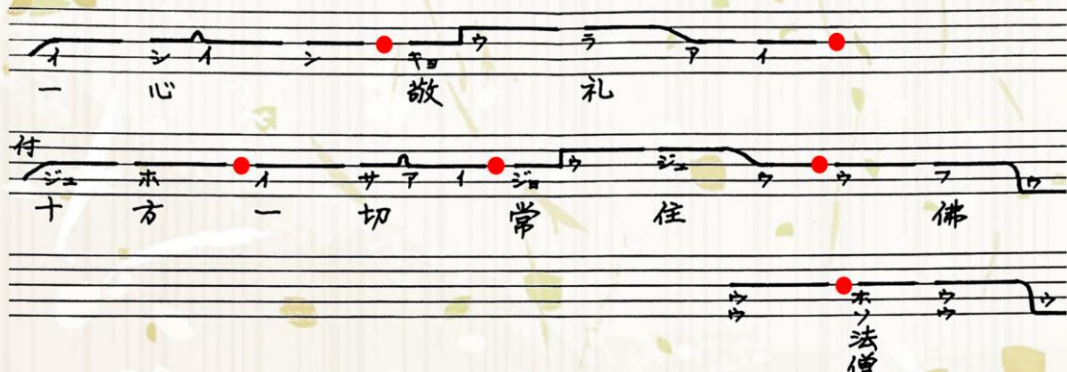
さんほうらい

い ー 心 ー 敬 ー 礼 ー 付 十 方 ー 一 切 ー 立 常 住 僧 ー
 い ー 心 ー 敬 ー 礼 ー 付 十 方 ー 一 切 ー 立 常 住 僧 ー
 い ー 心 ー 敬 ー 礼 ー 付 十 方 ー 一 切 ー 立 常 住 僧 ー

音声を聞く



三宝礼は、道場偈でお迎えした仏・法・僧(三宝)へ感謝をささげる声明です。文意は「一心に敬って礼拝し、とこしえにすべての生きとし生けるものを救い導かれる本師釈迦牟尼仏に帰依いたします。一心に敬って礼拝し、大いなる智慧をそそぎ、平等にすべてのものを仏の道に導く妙法蓮華経に帰依いたします。一心に敬って礼拝し、み仏の使い上行菩薩の自覚にたつて、すべてのものを救い導く日蓮宗の宗祖日蓮大菩薩に帰依いたします。」と願ひ上げます。なお「立」という記号では、立ち上がり曲躬低頭という特別な礼拝を行います。



かんじょう

勸請

(導師独唱)

諸天善神をお招きする

ウェルカムメッセージ

法要を始める前に、諸天善神やご先祖様を本堂へお招きする願文です。お釈迦様、お釈迦様の弟子、様々な神様、菩薩様、日蓮聖人、妙輪寺歴代住職、あなたのご先祖様等をお招きします。この願文は導師の独唱となりますので、皆様は心の中でこの願文を念じて、諸天善神をお招きして下さい。

つし

かんじょう たてまつ

なむりんねんぐそく みぞう だい まんだら

ほんぞん

謹んで勸請し奉る

南無輪具足未曾大曼荼羅ご本尊

なむびようどうだいえ

いちじょうみようほうれんげきよう

なむくおんじつじようだいおん

南無平等大梵

一乗妙法蓮華経

南無久遠実成大恩

きようしゅほんししゃかむにぶつ

なむしようみよう

ほつけたほう だいぜんぜい

教主本師釈迦牟尼仏

南無證明

法華多寶大善逝

なむじつほうふんじんさんぜ

しよぶつ

なむじようぎよう

むへんぎよう じようぎよう

南無十方分身三世の諸佛

南無上行

無邊行 淨行

あんりゆうぎようどう

ほんげじゆ

しよだいじ

なむもんじゆ

ふげん

みろく

安立行等

本化地湧の諸大士

南無文殊

普賢

彌勒

やくおう やくじよう

ゆうぜ

みようおん

かんのんどう

しゃつけたほうらい

だいこん

さつた

薬王 薬上 勇施

妙音

観音等

迹化他方來の大權の薩

なむしんじ

もくれん

かしよう

あなんとう

しんとつき

しよだいしろうもん

南無身子

目連

迦葉

阿難等

新得記の諸大

聲聞

いちじようおうい

しよてんぜんしん

そう

ほけきようちゆう じようじゆういつさい

一乗擁護の諸天善神

総じては法華経中

常住一切の

さんほう こと

まつほううえん

だいどうし

こうそ

にちれんだいほさつ

三宝殊には末法有縁の

大導師高祖日蓮大菩薩

ろくちゆうくろうそうとう

しゅうもんれきだい

によほうくんこう

せんしせんてつ

六中九老僧等

宗門歴代

如法勲功の先師先哲

ふくじゆさん みようりんじ かいさん

だいきようあじやりにちりんしようにんいらいれきだい

福聚山妙輪寺開山

大経阿闍梨日輪聖人以来歴代の

ししようにん なら

け せんぞだいだい

しよしよりようときんかんじよう

ぜんじん

諸上人並びに

〇〇家先祖代々の諸精霊当山勸請の善神

ごほうぜん

お

ほんじつ しゆしたてまつ ところ

かいき

あいおつころ

の御宝前に於いて

本日主旨奉る処

〇〇回忌に相値処

れいい

らいとつじよう

ちけんしいうらん

ごほうみのうじゆ

〇〇靈位

来到道場

知見照覧

御法味納受

音声を聞く



開經偈

法華經に出会えた
奇跡に感謝感激

開經偈は、妙法蓮華經（法華經）の読みはじめに唱える短い讃（ほめたたえ）で「無上甚深・・・」と仏の教えの尊さをたたえ、いま出会えた喜びと学ぶ決意を表す偈（げ）です。偈とは、リズムと韻を備えた仏教の詩歌のことです。心に刻みやすい形で教えを伝えます。日蓮宗では朝夕の勤行で法華經を拝読する前に唱えて心を整えます。散った心を一つに集め、教えを素直に受け取る姿勢をつくる扉の役割です。続く題目「南無妙法蓮華經」へと心が自然につながり、聞く・学ぶ・実践する一日の出発点になります。

音声を聞く



無上甚深微妙の法は、百千万劫にも

遭いたてまつること難し。我れ今見聞し

受持することを得たり。願わくは如来の

第一義を解せん。至極の大乗、思議すべからず

見聞触知、皆菩提に近づく。能詮は報身。

所詮は法身。色相の文字は、即ち是れ応身なり。

無量の功德、皆是の經に集まれり。是故に自在に、

冥に薰じ密に益す。有智無智、罪を滅し善を生ず。

若は信、若は謗、共に佛道を成ぜん。

三世の諸佛、甚深の妙典なり。

生々世々、値遇し頂戴せん。



開經偈では「思議すべからず」まで合掌し「見聞触知」で經本を両手で持ち、目の高さまで上げる。そして「値遇し頂戴せん」の時に頭を軽く下げて上げていた經本を降ろす。これを「頂經」（ちやうきやう）と呼ぶ。

みようほうれんげきよう

ほうべんぼん だいに

妙法蓮華經 方便品第二

にーじーせーそん じゅうさんまい あんじょうにーきー ごうしゃりほつ しょーぶつちーえ
爾時世尊 從三昧 安詳而起 告舍利弗 諸仏智慧

じんじんむーりよー ごーちーえーもん なんげーなんにゆー いっさいしやうもん ひやくしーぶつ
甚深無量 其智慧門 難解難入 一切声聞 辟支仏 18

しよーふーのうちー しよーいーしゃーがー ぶつぞうしんこん ひやくせんまんのく むーしゆーしよーぶつー
所不能知 所以者何 仏會親近 百千万億 無數諸仏

じんぎよーしよーぶつ むーりよーどうほー ゆうみようしやうじん みようしやうふーもん じやうじゆーじんじん
尽行諸仏 無量道法 勇猛精進 名稱普聞 成就甚深

みーぞーうーほー ずいぎーしよーせつ いーしゆーなんげー しやりほつ ごーじゆーじやうぶつちーらい
未曾有法 隨宜所説 意趣難解 舍利弗 吾從成仏已來

しゆーじゆーいんねん しゆーじゆーひーゆー こうえんこんきやう むーしゆーほうべん いんどうしゆーじよー
種種因縁 種種譬諭 広演言教 無數方便 引導衆生

りやうりーしよーじやく しよーいーしゃーがー によーらいほうべん ちーけん はらみつ
令離諸著 所以者何 如來方便 知見波羅蜜

かいーいー ぐーそく しやりほつ によーらいちーけん こうだいじんのもん むーりやうむーげー
皆已具足 舍利弗 如來知見 広大深遠 無量無礙

りき むーしよーいー ぜんじやう げーだつ さんまい じんにゆーむーさい
力 無所畏 禪定 解脱 三昧 深入無際 19

じやうじゆーいっさい みーぞーうーほー しやりほつ によーらいのうしゆーじゆーふんべつー
成就一切 未曾有法 舍利弗 如來能種種分別

ぎやうせつしよーほー こんじーにゆーなん えつかーしゆーしん しやりほつ しゆーよーこんしー
巧説諸法 言辞柔軟 悦可衆心 舍利弗 取要言之

むーりやうむーへん みーぞーうーほー ぶつしつじやうじゆー しー しやりほつ
無量無辺 未曾有法 仏悉成就 止 舍利弗

不須復説 所以者何 仏所成就 第一希有 難解之法

ゆいぶつよーぶつ ないのーくーじん しよーほうじつそう

唯仏与仏 乃能究尽 諸法実相

以下を三回繰り返す

「所謂諸法 如是相 如是性 如是体 如是力 如是作

によーぜーいん によーぜーえん によーぜーかー によーぜーほう によーぜーほんまつくーきようとう

如是因 如是縁 如是果 如是報 如是本末究竟等」

『方便品第二』は、法華經の入口であり核心です。ここでは、お釈迦さまが人それぞれの理解や状況に合わせて、わかりやすい教え（方便）を用い、本當の目的へ導くことを宣言します。最終の目的は「一仏乘」、すべての人が仏の境地に至れる道は一つである、という断言です。とりわけ大切なのが「諸法実相」ということばで、物事のほんとうの姿を示します。続く「十如是（相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等）」は、その見方を十の側面で説明し私たちの日常の出来事や悩みも仏道の成長の材料だと示します。日蓮宗では方便品は「今の自分の地点から真実へ向かう宣言」の章として重視し、朝夕の勤行で拝読します。題目とともに読むことで、「誰もが成仏できる」という確信が日々の生活に根づき、迷いの中にも一歩進む勇氣が養われます。

音声を聞く



妙法蓮華經 提婆達多品第十二

みようほうれんげきよう

だいば

だった

ほん

だい

じゆうに

深くー罪福のー相をー達しーてー。遍くー十方をー

ふか ざいふく

そう

たつ

あまねー

じつほう

照しーたーもう。微妙のー淨きー法身。相をー

てら

みーみよう

きよ

ほっしん

そう

具せるーこーとー三十二。八十種好をー以てー。

ぐ

さんじゅうにー はちじつしゅーごう

もつ

用つてー法身をー莊嚴せーりー。天人のー戴仰

も

ほっしん

しょうげん

てんにん

たいごう

する所。龍神もー咸くー恭敬すー。一切衆生のー類。

ところー りゅうじん

ことごと

くーぎよう

いっさいしゅーじよう

るい

宗奉せざる一者なし。又聞いて一菩提を

成ずるこゝと。唯仏の一み。當に一証知

したもうべし。我大乘の一教を一聞いて。

苦の衆生を一度脱せん。

爾の時に一舍利弗。龍女に一語つて一言わく。

汝久し一からずして。無上道を一得たり。

と一謂え一る。是の事信じ一難し。所以は

何ん。女身は一垢穢に一して一是れ一法器に

非ず。云何ぞ一能く。無上菩提を一得ん。

仏道は一懸曠な一り。無量劫を一経て。

勤苦し一て一行を一積み。具さ一に諸度を

修し。然し一て一後に一乃ち一成ず。

また一女人の一身には。猶五の一障り。

あり。一に一は一梵天王と一なることを一得ず。

二には一帝釈。三に一は一魔王。四には一轉輪聖王。

五には一仏身な一り。云何ぞ一女身。速かに

成仏じょうぶつすることを得えん。爾その時ときに―龍女りゅうにょ一つ―の―

宝樹ほうじゅあ―り―。価直けぢき三千大千世界さんぜんだいせんせかいな―り―。

持もつて―以もつて―仏ほとけに―上たてまつる―。仏ほとけ即すなわち―之これを―

受うけた―も。龍女りゅうにょ。智積ちやく菩薩ぼさつ。尊者そんじや舍利弗しやりほつに―

謂いつて―言いわく―。我われ宝樹ほうじゅを―献たてまつる―。世尊せそんの―

納受のうじゅ。是この事疾じしや―。不いなや―。答こたえ―て―

言いわく―。甚疾はなはだし―。女にょの―言いわく―。汝なんじが―

神力じんりきを―以もつて―。我わが―成仏じょうぶつを―觀みよ―。

復またこれよりも―速すみかな―らん。當時とうじの―衆会しゆゑ。

み―な―龍女りゅうにょの―忽然こつねんの―間あいだに―。変へんじ―て―

男子なんしと―成なつて―。菩薩ぼさつの―行ぎようを―具ぐして―。

即すなわち―南方無垢世界なんほうむくせかいに―往ゆいて―。宝蓮華ほうれんげに―

坐ざして―等正覺とうしようかくを―成じようじ―。三十二相さんじじゅうにそう。八十種好はちじっししゅこう

あつて―。普あまねく―十方じつほうの―。一切衆生いっさいしゆじようの―為ために―。

妙法みょうほうを―演説えんぜつするを―見みる―。爾その時ときに―娑婆しゃば

世界せかいの―。菩薩ぼさつ。声聞しょうもん。天龍八部てんりゅうはちぶ。人にんと―非人ひにんと―。

皆遥かーに彼のー龍女のー成仏しーてー。普くー

時のー会のー人天のー為にー。法をー説くをー

見てー。心大いーにー歡喜しーてー。悉くー遥かー

にー敬礼すー。無量のー衆生。法をー聞いてー

解悟しー不退転をー得。無量のー衆生。道のー

記をー受くるーことをー得たりー。無垢世界。

六反にー震動すー。娑婆世界のー三千のー衆生。

不退のー地にー住しー。三千のー衆生。菩提心をー

発しーてー。授記をー得たりー。智積菩薩。及びー

舍利弗。一切のー衆会。默然とーしーてー信受すー。

『提婆達多品第十二』は、だれもが成仏できることを具体例で示す章です。まずお釈迦さまを迫害した提婆達多が、かえって仏道の“恩人”として未来成仏を明言されます。ここには「過ちの多い者でさえ、心を転じれば仏へ至る」という大きな赦しと希望が示されています。

とくに日蓮宗で重視するのが「龍女成仏」です。八歳の龍王の娘が、宝珠をさし出し、たちまち仏となる物語は、女性でも、さらに人間以外の存在（龍＝動物的存在）でも、仏に成り得ることを明言します。当時は「女性は成仏しにくい」という偏見が強くありましたが、この章はそれを正面から打ち破ります。性別や身分、姿かたちに関わらず、いのちそのものが仏へ向かう力をもつ——これが法華經の核心です。

日蓮聖人は、題目を唱える一念に男女の差別はなく、動物を含む一切衆生に仏性が具わると説きました。だからこそ、私たちは日々の暮らしで、女性や子ども、弱い立場の人、自然やいのちもあるものを敬い差別や自己否定を超える実践を重ねます。提婆達多の悔い改めと龍女の成仏は、「どんな人も、今ここから成仏の道に立てる」ことの象徴です。題目を根本に、偏見を手放し、他者と自分の可能性を信じるところにこの品の生きた力があらわれます。

音声を聞く



妙法蓮華經 如来寿量品第十六

自我得仏来

所経諸劫数

無量百千万

億載阿僧祇

常説法教化

無數億衆生

令入於仏道

爾来無量劫

為度衆生故

方便現涅槃

而実不滅度

常住此説法

我常住於此

以諸神通力

令顛倒衆生

雖近而不見

衆見我滅度

広供養舍利

咸皆懷恋慕

而生渴仰心

衆生既信伏

質直意柔軟

一心欲見仏

不自惜身命

時我及衆僧

俱出靈鷲山

我時語衆生

常在此不滅

以方便力故

現有滅不滅

余国有衆生

恭敬信樂者

我復於彼中

為説無上法

汝等不聞此

但謂我滅度

我見諸衆生

没在於苦海

故不為身現

令其生渴仰

因其心恋慕

乃出為説法

神通力如是

於阿僧祇劫

常在靈鷲山

及余諸住处

衆生見劫尽

大火所燒時

我此土安穩

天人常充滿

園林諸堂閣

種種宝莊嚴

宝樹多華果

衆生所遊樂

諸天擊天鼓

常作衆妓樂

うーまんだーらーけー
雨曼陀羅華

さんぶつきゆうだいしゅー
散仏及大衆

がーじようどーふーきー
我浄土不毀

にーしゅーけんしようじん
而衆見烧尽

うーふーしーくーのう
憂怖諸苦恼

によーぜーしつじゅうまん
如是悉充滿

ぜーしよーざいしゅーじよう
是諸罪衆生

いーあくごういんねん
以惡業因縁

かーあーそうぎーこう
過阿僧祇劫

ふーもんさんほうみよう
不聞三宝名

しよーうーしゅーくーどく
諸有修功德

にゅーわーしちじきしやー
柔和質直者

そつかいけんがーしん
則皆見我身

ざいしーにーせつほう
在此而説法

わくじーいーしーしゅー
或時為此衆

せつぶつじゅーむーりよう
説仏寿無量

くーないけんぶつしやー
久乃見仏者

いーせつぶつなんちー
為説仏難値

がーちーりきによーぜー
我智力如是

えーこうしやうむーりよう
慧光照無量

じゅーみやうむーしゅーこう
寿命無數劫

くーしゅーこうしよーとく
久修業所得

によーとーうーちーしやー
汝等有智者

もつとーしーしやうぎー
勿於此生疑

とうだんりやうようじん
当断令永尽

ぶつごーじつぷーこー
仏語実不虛

によーいーぜんほうべん
如医善方便

いーじーおうしーこー
為治狂子故

じつざいにーごんしー
實在而言死

むーのうせつこうもう
無能説虚妄

がーやくいーせーぶー
我亦為世父

くーしよーくーげんしやー
救諸苦患者

いーほんぶーてんどう
為凡夫顛倒

じつざいにーごんめつ
實在而言滅

いーじようけんがーこー
以常見我故

にーしやうきやうしーしん
而生憍恣心

ほういつじやくごーよく
放逸著五欲

だーおーあくどうちゅう
墮於惡道中

がーじようちーしゅうじよう
我常知衆生

ぎやうどうふーぎやうどう
行道不行道

ずいおうしよーかーどー
随応所可度

いーせつしゅーじゅーほう
為説種種法

まいじーさーぜーねん
每自作是念

いーがーりようしゅーじよう
以何令衆生

とくじゆうむーじようどう
得入無上道

そくじようじゅーぶつしん
速成就仏身

『如来寿量品第十六』は、法華經の心臓部といわれます。ここで明かされるのはお釈迦さまは遠い昔に亡くなった方ではなく、はかり知れない寿命をもって、今もずっと私たちを導いているという真実です（久遠実成といえます）。私たちが迷いの只中にあっても、仏のいのちは途切れず働いている——この安心こそが寿量品の力です。日蓮宗の法要で必ず拝読するのは、この安心を参詣者一人ひとりに行き渡らせるためです。追善供養では、亡き人のいのちが仏の大いのちに抱かれていると確信し、生きる私たちはその働きを信じて歩む決意を新たにします。仏は常にそばにいてはたらく——その仏と私たちが声でつながるのが題目です。だから寿量品を読み、題目を唱えると恐れや孤独がやわらぎ「今ここから善く生きる」力が起こります。日々の勤行から年中法要まで寿量品を大切にするのは、仏のいのちと私たちのいのちが離れないことを、読むたびに確かめるためなのです。

音声を聞く



妙法蓮華經 如来神力品第二十一

爾時に佛。上行等の菩薩。

大衆に告げたまわく。諸仏の神力は

是の如く。無量無邊不可思議なり。

若し我の神力を以て。

無量無邊百千萬億阿僧祇劫に於て。

屬累の爲の故に。此の經の功德を

説かんに。猶つくすこと能わじ。

要を以て之を言わば。如来の一切の

所有の法。如来の一切の自在の神力。

如来の一切の祕要の藏。如来の一切の

甚深の事。皆この經に於いて宣示顯説す。

是の故に汝等。如来の滅後に於いて。

應當に一心に受持。讀誦し。解説。

書寫し。説の如く修行すべし。

所在の國土に。若しは受持。讀誦し。

解説。書寫し。説の如く修行し。

若しは―經卷所住の―處あ―らん。
 若しは―園の―中に―於いて―も。
 若しは―林の―中に―於いて―も。
 若しは―樹の下に―於いて―も。
 若しは―僧坊に―於いて―も。
 若しは―白衣の―舎にて―も。
 若し―は殿堂に―在つて―も。
 若しは―山谷曠野にて―も。
 是の中に―皆塔を―起てて―供養すべし。

所以は―何。當に―知るべし。
 是の處は―即ち―是れ―道場なり。
 諸佛ここに―於いて―阿耨多羅三藐三菩提を―得。
 諸佛ここに―於いて―法輪を―轉じ。
 諸佛ここに―於て―般涅槃したもう。

『如来神力品第二十一』は、仏のはかり知れない神力を示し、法華經を未来へ受け継ぐ使命を菩薩に託す章です。ここでは、仏の加持力が一切衆生を励まし守ること、そして法華經を広める誓いが明らかにあります。日蓮宗で男性のご供養にこの品を拝読するのは、仏の神力による家族・子孫の守護と、故人の志や家業・信仰の継承を願う意義が重ねられてきたためです。とくに「受持・読誦・解説・書写」を勧める教えは「生きる者が誓いを引き継ぐ」営みそのものであり報恩と家の繁栄安泰を祈る供養にふさわしいからです。

音声を聞く



五番神咒

(妙法蓮華經陀羅尼品第二十六)

安爾 曼爾 摩爾 摩摩爾 旨隸 遮梨第 棄竿 棄履 多喜

羶帝 目帝 目多履 沙履 阿喜沙履 桑履 沙履 叉裔 阿叉裔

阿耆膩 羶帝 棄履 陀羅尼 阿盧伽婆娑 簸蔗里叉膩 禰里剎

阿便灌 邏禰履剎 阿直灌波隸輸地 急究隸 牟究隸 阿羅隸

波羅隸 首迦差 阿三磨三履 仏駄毘吉利 宴帝 達磨波利差帝

僧伽涅瞿沙禰 婆舍婆舍輸 曼灌邏 曼灌邏叉夜多 郵樓灌

郵樓灌 隱舍略 惡叉邏 惡叉治多治 阿婆盧 阿摩若 那多夜

確隸 摩訶確隸 郁枳 目枳 阿隸 阿羅婆第 涅隸第

涅隸多婆第 伊緻株 韋緻株 旨緻株 涅隸滑株 涅梨滑婆底

阿犁 那犁 傾那犁 阿那盧 那履 拘那履

阿伽禰 伽禰 瞿利 乾陀利 旃陀利 摩牙耆 常求利

浮樓莎株 穩底

伊提履 伊提履 伊提履 伊提履 伊提履 泥履 泥履 泥履

泥履 泥履 樓醯 樓醯 樓醯 樓醯 多醯 多醯 多醯 兜醯 傾醯

得無生法忍

『妙法蓮華經陀羅尼品第二十六』は、法華經を信じて実践する人を守るための「陀羅尼(呪文)」を示す章です。ここ

持国天(青)、十羅刹女と鬼子母神(橙)、勇施菩薩(緑)、毘沙門天(紫)、ものでは、薬王菩薩(赤)、毘沙門天(紫)、

音声を聞く



普賢咒

（妙法蓮華經 普賢菩薩勸発品第二十八）



あたんたい 阿檀地 檀陀婆地 檀陀婆帝 檀陀鳩棄隸 檀陀修陀隸
しゅだれ 修陀隸 修陀羅婆底 仏駄波羶禰 薩婆陀羅尼 阿婆多尼
さるばしや 薩婆婆沙 阿婆多尼 修阿婆多尼 僧伽婆履叉尼 僧伽涅
ぎやだに 伽陀尼 阿僧祇 僧伽婆伽地 帝隸阿憤 僧伽兜略 阿羅帝
はらて 波羅帝 薩婆僧伽 三摩地 伽蘭地 薩婆達磨 修波利刹帝
さるばさつたろだ 薩婆薩嬉樓駄 隱舍略 阿傾伽地 辛阿毘吉利地帝

普賢咒は『妙法蓮華經 普賢菩薩勸発品第二十八』から抜粋された陀羅尼で、普賢菩薩が法華經を受持する人を必ず護ると誓った「陀羅尼（呪文）」です。唱えることで、罪障消滅・災難除去・病氣平癒・心願成就の加護を得て、信心を続ける勇氣と精進の力が養われると説かれます。

宝塔偈

（妙法蓮華經 見宝塔品第十一）



しきょうなんじー 此經難持 若暫持者 我即歡喜 諸仏亦然 如是之人
しよぶつしよーたん 諸仏所歎 是則勇猛 是則精進 是名持戒 行頭陀者
そくいしつとく 則為疾得 無上仏道 能於來世 讀持此經 是真仏子
じゅうじゅんぜんちー 住淳善地 仏滅度後 能解其義 是諸天人 世間之眼
おくいーせー 於恐懼世 能須臾説 一切天人 皆應供養

「宝塔偈」は『妙法蓮華經 見宝塔品第十一』から抜粋された偈で、法華經の眞實を証明する宝塔が地中から現れ、多宝如来が釈尊の説法を“まこと”と讃える場面を要約しています。日蓮宗の法要で唱えるのは、私たちが今ここで聞く教えが尊い眞理であることを心に刻み信心を固めるためです。読誦の功德として迷いを離れて心が落ち着く、善い縁が育つ、災いや障りが軽くなる、家内安全・所願成就へと導かれる等が説かれます。

日蓮聖人御妙判

御妙判またはご遺文や祖訓ともいいます。日蓮聖人の書き遺された論文やお手紙を総称して「御妙判」とよびます。数ある御妙判の中からその法要に適したものを選びお唱えします。

観心本尊抄

かんじんほんぞんしょう
にちれんしょうにん ごみようはん

日蓮聖人御妙判

かんじんほんぞんしょう
観心本尊抄に示して曰く いわ

いまほんじ

しゃばせかい

さんさい

はな

しこう

い

今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる

じょうじゅう

じょうど

ほとけすで

かこ

めつ

みらい

常住の浄土なり

仏既に過去にも滅せず未来にも

しょう

しよけもつ

どうたい

こ

すなわ

こしん

さんぜんぐそく

生ぜず所化以て同体なり此れ即ち己心の三千具足

さんしゅ

せけん

三種の世間なり

「観心本尊抄」は、文永十年（一二七三）に著されました。心の見つめ方（観心）と拝む対象（本尊）は法華經に具わると示し、「南無妙法蓮華經」を唱えることで成仏に至れると説きます。

音声を聞く



報恩抄

ほうおんじょう
にちれんしょうにん ごみようはん

日蓮聖人御妙判

ほうおんじょう
報恩抄に示して曰く いわ

にちれん

じひ

こうだい

なむみょうほうれんげきよう

まんねん

ほか

日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は万年の外

みらい

未来までもながるべし

にほんこく

いっさいしゅじょう

もうもく

未来までもながるべし

日本国の一切衆生の盲目を

ひらける

くどく

無間地獄の道をふさぎぬ此の

むけん

じごく

みち

こ

此の

功德は伝教天台にも超へ龍樹迦葉にもすぐれたり

でんぎようてんだい

こ

りゅうじゅかしよう

およ

しょうぞうにせん

正像二千

極楽百年の修行は穢土一日の功に及ばず

ごくらくひゃくねん

えど

いちにち

こう

およ

正像二千

年の弘通は末法の一時に劣るか

ねん

ぐづう

まっほう

いちじ

おと

これ

是はひとへに日蓮

が智のかしこきにはあらず時のしからしむるのみ

ち

かきこき

あらず

とき

しからしむるのみ

にちれん

日蓮

建治二年（一二七六）七月、先月に遷化された日蓮聖人の師僧でもある、清澄寺の道善坊の追善のために執筆されたといわれています。

おつとめ回向文 (導師独唱)



音声を聞く

つし うやま じょうらい ところ くだく なむ くおんじつじょう
謹み敬つて上來あつむる所の功德。南無久遠實成
ほんし しかむにぶつ なむいちじょうみようほうれんげきよう なむまつほう
本師釈迦牟尼仏。南無一乘妙法蓮華經。南無末法
うえん だいどうし こうそ にちれんだいほさつ しゅうもんれきだい によほうくんこう
有縁の大導師高祖曰蓮大菩薩。宗門歴代如法勲功
せんし えこう てんじょうちかいごほう ぜんじんとく ほうらく
の先師に回向し。天上地界護法の善神等に法樂し
たてまつ あお ねが いってんしかいかいきみようほう まっほうまん
奉る。仰ぎ願わくは。一天四海皆帰妙法。末法萬
ねんこうせん るふ てんちようちきゅうこくどあんのん ごくじようじゅ ばんみん
年廣宣流布。天長地久國土安穩。五穀成就萬民
あんらく かないあんぜん そくさいえんめい しそんちようきゅう かもんはんねい
安樂。家内安全息災延命。子孫長久家門繁榮。
それがしおよ かないじゅう めんめん むしいらい ろっこんさんげさいしようしうめつ
某及び家内中の面々。無始以來六根懺悔罪障消滅。

くに ほうほう こえ ばんみんかず げん いえ さんぎよう
國に謗法の音なくんば萬民数を減ぜず。家に讚經
つと の勤めあらば七難必ず退散せしめん。又願わくは
とうけ せんぞ だいだい いっけいちもん しようりよう そう また ねが ほうかいかい
當家先祖代々一家一門の諸精靈。総じては法界海
うむりようえん しようりよう さほうれんげじうとうしようかく みようほうきようりき
有無両縁の諸精靈。坐寶蓮華成等正覺。妙法經力
そくしんじようぶつ がん に し くだく ふぎゅう おいっさい がとうよしゅじよう
即身成仏。願以此功德普及於一切。我等興衆生
かいぐじようぶつどう なむみようほうれんげきよう
皆共成仏道。南無妙法蓮華經。

回向とは、自分の勤行で得た善い力（功德）を、自分だけでなく先祖や社会、すべてのいのちへ「向け直す」ことです。この回向文は、日々のおつとめの締めくくり唱え、積んだ功德を広く分かち合う誓いを言葉にします。内容は、久遠実成のお釈迦様や歴代の先師を敬い護法の善神に法の喜びを捧げることから始まります。つづいて、国の安全・五穀豊穰・国民の平和、そして家内安全や息災延命など、私たちの暮らしと社会が整うよう祈ります。さらにはるかな過去からの様々な過ちを懺悔して罪障消滅を願い、家々に読経があれば七難が退くと励まします。最後に、自分のご先祖様とすべての靈位へ功德を回し、妙法の力でともに成仏の道に至らせてください、と結び、題目「南無妙法蓮華經」で心をひとつに整えます。

追善供養 回向文 (導師独唱)

上來鳩じようぐい あつむるところの功德くどくをもって今日こんにち○○忌きに相値あいおう
処ところの○○靈位れいいい別べつしては○○家先祖代々け せんぞ だいだいの諸精靈しよしやうりやうに
回向えこうし報地ほうちを嚴淨げんじやうす。仰あおぎ願ねがくは一切いっさいの三寶さんほう哀あい愍みん
加持かじし給たまえ。専もつぱら祈いのるところは○○靈位れいいい。白業緣起びやくごうえんぎ
の寶土ほうどに於おいて回向供養えこうくやうの法樂ほうらくを受け。無始むしの
重障じゆうしやうを滅除めつじよし。親まのあたり諸仏しよぶつを見奉みたまつることを得え。
妙法みやうほうを聴受ちやうじゆし。三因さんいんを開発かいほつし。三徳さんとくを資成しじやうし。
この寶乘ほうじやうに乗じやうじて普あまねく法界ほうかいに遊あそび。疾とく道場どうじやうに

趣おもむいて仏知見ぶつちけんを開ひらき。寶蓮華ほうれんげに坐ざして等正覺とうしやうかくを
成じやうぜんことを。
妙法經みやうほうきやう力即身成仏りきそくしんじやうぶつ。乃至法界平等利益ないしほうかいびやうどうりやく。
南無妙法蓮華經なむみやうほうれんげきやう。

追善供養の回向とは、自分たちが読経や善い行いで得た功德を、亡き方に
さし向け、その歩みを助ける祈りです。この回向文は、法事場で
「今日の○○回忌にあたる○○靈位へ」と故人名や戒名を明記して功德を
回し、先祖代々にも広く及ぼします。まず三宝（仏・法・僧）のお慈悲と
加護を願い、故人が清らかな浄土で供養のよろこびを受け、重い罪障が
除かれ、諸仏に出会い、法華経を聞いて仏の智慧に目覚めていけるよう
祈ります。さらに「三因（因果を開く智慧）・三徳（仏の徳）」を備え
法の宝の乗り物に乗って迷いを超え、蓮華座に坐して等正覺Ⅱさとりを
成就できるよう願い結びます。最後に題目「南無妙法蓮華経」を唱え
功德が故人と一切衆生に等しく行きわたることを誓います。

音声を聞く

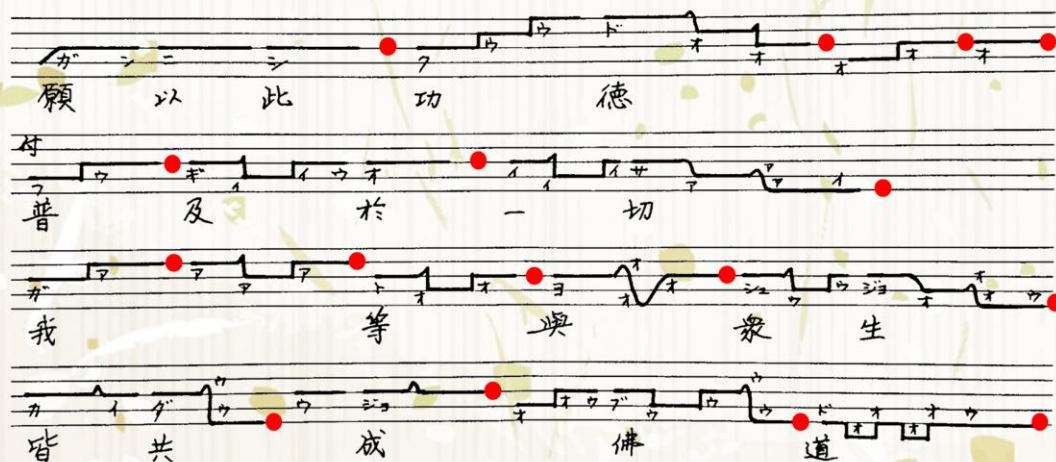


回向伽陀 (導師独唱)



願 以 此 功 德
普 及 於 一 切
我 等 與 衆 生
皆 共 成 佛 道

回向伽陀は回向の結びで唱える「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成仏道」という願いを声明として唱える一節です。回向の結びに導師が独唱し場を代表して祈りをまとめます。意味は「このお勤めや修行で積んだ功德を私を含むすべてのいのちへ広く回し、みなが共に仏の道を成じますように」という願いです。すなわち個人の徳にとどめず先祖・ご縁ある人びと・社会・一切衆生へ功德を分かち合う誓いを声で確かめる締めくくりの声明です。



祈願文 (導師独唱)



南無佛 南無僧 南無一乘妙法蓮華經 祈禱 本尊 南無最上位經王
大菩薩 為悦衆生故 現無量神力 八大龍王 三面大黒天 南無七十七
末社諸天王 ことには 開祖報恩大師魔訶上人 各々 來臨影現
知見照覽 法味納受 一乘の行人 信行清浄の祈願によって修し
奉る經王秘妙嚴秘段修練加持 この功力を得て願主〇〇殿志すところ
「家内安全・身体健全・心願成就」 この功德をもつては 例え年の難
月の難 日の難 時の難等あるといえども 大難は小難に 小難は
無難に 變じ 轉じて 息災延命とご守護なさしめたまえ 願以此功德
普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道 乃至法界平等利益
南無妙法蓮華經

心願（願い事）があるときに、お勤めの結びで読み上げる祈願文です。妙輪寺は日本三大稻荷の一つ・最上稻荷を勧請しており、この祈願文はお稻荷さま―最上位經王大菩薩の法力を仰いで、願いの成就と道の整いを願い上げる内容になっています。

四弘誓願（四誓）

しゅじょうむへんせいがんど

衆生無辺誓願度

ほんのうむしゅせいがんだん

煩惱無数誓願断

ほうもんむじんせいがんち

法門無尽誓願知

ぶつどうむじょうせいがんじょう

仏道無上誓願成

音声を聞く



四弘誓願は仏道を歩む者が必ず立てる四つの誓いです。日蓮宗では、末法に法華経を弘めることを誓った四名の菩薩——上行・無辺行・淨行・安立行菩薩の精神と重ねて受けとめます。「衆生無辺誓願度」は数えきれない人々を救おうという誓いです。際限なく人に向き合う広さは、名のとおり「境界が無辺」の無辺行菩薩の徳に響きます。「煩惱無数誓願断」は尽きない迷いを断つ誓いです。自らを清め続ける実践は、身口意を清浄に保つ淨行菩薩のはたらきに通じます。

「法門無尽誓願知」は尽きることのない教えを学び続け、工夫して伝える誓いです。あらゆる場へ勇んで進む上行菩薩の「先頭に立つ精進」を想起させます。

「仏道無上誓願成」は最高の道である仏道を必ず成し遂げる誓いです。揺らぐ場にも法を安立（あんりつ）する安立行菩薩の不動心が重なります。

法要の最後に四弘誓願を唱えるのは、読経で得た功德を「生き方の約束」へと結び直し日常の行動に持ち帰るためです。つまり、今この場で人を励まし、自らを磨き、法を学び志を貫く——その実行宣言になります。日蓮宗では題目とともに唱えることで、四つの誓が法華経の実践（受持・読誦・解説・書写）に直結することを確かめます。

奉送

音声を聞く



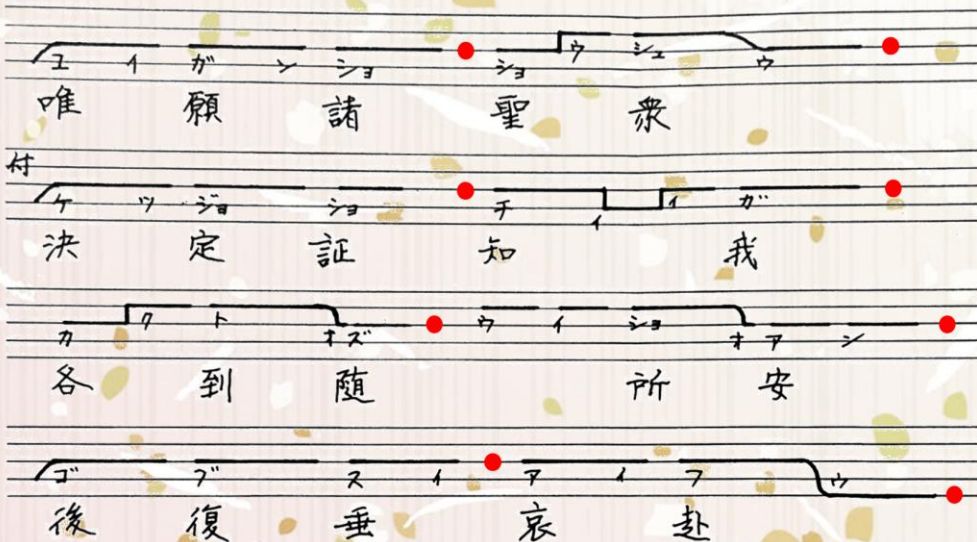
唯願諸聖衆付

決定證知我

各到隨所安

後復垂哀赴

「奉送」は、法要の最後にお唱えする声明です。冒頭の「道場偈」が仏・法・僧を道場へお迎えするなら奉送はお迎えした聖衆を丁重にお送りし、法会を円成させる結びの唱えです。文意は「本日の功德を礎に、私たちは成仏へ歩むと誓います。どうかその誓いをお認めくださり、それぞれの御座へお還り下さい。やがて再び慈悲を垂れてお導きください」と願うこと。



ご縁をつなぎ直す香煙

法事でのお焼香は、いのちの縁を温かく「つなぎ直す」祈りです。香は身と心を清め、集う家族の想いを一つにします。立ちのぼる香煙は、故人と先祖、そして今を生きる私たちを静かに結び、感謝と報恩の気持ちを運びます。「ありがとう」「見守ってください」「心配しないで」「そんな言葉にならない想いを、そっと香に託してください」。

一炷の香は、すぐに広がり、やがて見えなくなりまゝ。それは、見えなくとも確かに届く慈しみの働きのためです。皆で香を重ねるたび、家の歴史に善き香り（功德）が満ち、故人の徳を讃え、悲しみをやわらげ、新たな一歩を支える力となります。どうか背筋を正し、静かに合掌してお焼香を。香のやさしい匂いの中で、故人と共に在る安心と、これから続くご縁を確かめてまいりましょう。

卒塔婆は想いの手紙

卒塔婆（そとうば）は、法事のたびに故人へ届ける“手紙”です。板に故人のお名前など祈りの言葉を書き入れ、法要で住職の読経とともに卒塔婆を立てる。それは「あなたを忘れていません」「感謝しています」「これからも見守ってください」という想いをまっすぐに届ける作法です。

香のかおりと読経のひびきにのって家族の願いは故人へ届きます。法事の時に立てられる卒塔婆は、家族一人ひとりのぬくもりを背負い、悲しみをやわらげ、故人の歩みを讃える“形ある手紙”です。法事のたびに新しい卒塔婆を用意するのは今この時の気持ちを言葉にして重ねていくためです。どうか次のご法事では卒塔婆をご用意ください。手を合わせるその一瞬が故人と私たちを結ぶ確かな絆となり、家の歴史にやさしい光を灯します。

法号、永遠の贈り物

人はこの世を去るとき、何を遺せるのでしょうか。財産や物は風化しますが、永く残るものが一つあります。それがあの世での名「法号（戒名）」です。

法号は儀礼の名ではなく、その人がいかに生き、何を大切にされたかを刻む魂の証です。住職は故人の人生を思い、数多の経文からふさわしい言葉を選び、一生に一度の法号を授けます。法号は妙輪寺の過去帳に記され、墓碑にも刻まれ、百年先、二百年先にも残ります。

いつか誰かがその名を見つめるとき、祈りと生き様が静かに語りかけるでしょう。伴侶を見送るなら最後の贈り物に、親を見送るなら最後の親孝行に。命の終わりは“無”ではありません。言葉として生きた証を遺すこと。それが、最もあなたにかなった供養であり、あなたの手で灯す光なのです。

魂がとどまる依代

位牌は亡き方の魂が「ここに在る」と感じられる、家の中の小さな聖域です。けれど、用意しただけではまだ“物”にすぎません。位牌に「開眼供養（かいげんくよう）」を行うことで、はじめに位牌にいのちの光が灯り、故人が安らかにとどまる拠り所となります。開眼とは、魂の居場所を正式に開く大切な儀式なのです。お墓が身体の安置所なら位牌は魂の宿る場所。日々の暮らしの中で手を合わせるたび感謝や報告迷いごとを、静かに語りかけることができます。

やがて歳月が流れても、位牌の前で手を合わせるかぎり故人はいつもあなたと共にあります。どうか心を整え開眼ののちの位牌を大切にお祀りください。その一礼一唱が、亡き方の安らぎを深め、あなたの毎日にやさしい光を灯してくれるはずで

妙輪寺に七百年伝わる仏教占術

「輪命術」は妙輪寺に七百年伝わる占い法です。妙輪寺二世日向上人が真言の修法と法華經の智慧を、あわせてまとめた。住職のみに伝わり、人々の命を垣根をこえて、より実践です。ここに紹介する良く生きる指針を示す。実践するのは、ここで紹介する再構成した一守護神の占いで、鑑定できる守護神の性格や得意分野が、あなたの内意に宿る。本来の資質（仏性）を

照らし出します。結果は「あなたらしさ」を責めたり決めつけるものではありません。強みもどこのにあるのか、つまづきやすい場面は何か、運気が動くタイミングはいつか。暮らしに役立つヒントとして受けとめ、人間関係、仕事や学びの方向づけに静かな後押しを。簡単だけれど奥深い妙輪寺ならではの智慧と、サイトには守護神占いの無料講座をご用意していますので是非ご覧下さい。



12月 生まれ 守護神 だい 大黒天
大黒天は仏教の福德神。あなたは「財・知識・人脈」を集め、増やし循環させて繁栄を开けに変える能力を秘めています。受け取った福を滞らせず回すほど縁が膨らみ事業と暮らしが弾み開運を得ます。



11月 生まれ 守護神 じ 持国天
持国天は四天王の一尊。あなたは凄まじい強運を呼び寄せ、その流れを味方につける能力を秘めています。小さな兆しを逃さず即行動で運氣を定着させれば、好機が連鎖し開運を手にすることができます。



10月 生まれ 守護神 こん ごう りき し 金剛力士
金剛力士（仁王）は護法の守護者。あなたは理不尽や大切な人が傷つく場面に直面すると、圧倒的な護持力で現実を動かす能力を秘めています。盾となり護るほど徳が積み、邪を退けて開運します。



9月 生まれ 守護神 だ き に てん 茶枳尼天
茶枳尼天、またの名は稻荷。あなたは論理より感覚で本質を察し誰よりも早く気づき先回りできる凄まじい直観力の能力を秘めています。自分の直感を信じて即行動すれば良縁と好機を呼び込み開運します。



8月 生まれ 守護神 こう もく てん 広目天
広目天は四天王の一尊。あなたは「因果率の千里眼」で、物事の裏に潜む因果を観察と分析で見抜く能力を秘めています。その洞察で最短の解決策を導けば迷いが晴れて機運が整い確かな開運を招きます。



7月 生まれ 守護神 きっ しょう てん 吉祥天
吉祥天は幸運の女神。あなたは人と人、物と人、時と行動を最善に結び直す能力を秘めている「ご縁のエキスパート」。出会いを丁寧に繋ぎ結縁を重ねるほど福德が集まり機運が整って開運します。



6月 生まれ 守護神 べん ざい てん 弁財天
弁財天は水の女神。あなたは心に響く知識や技術を水を吸うように習得し磨き上げ何倍にも高めて発信できる能力を秘めています。学びを表現し共有するほど波紋が広がり縁と評価を呼び込み開運します。



5月 生まれ 守護神 き し も じん 鬼子母神
鬼子母神は元は鬼、今は家族を護る守護神。あなたは因果を迅速に巡らせる強力な因果応報の能力を秘めています。善行は倍加して開運を招き、愚しき行は即座に返る自戒が護りとなります。



4月 生まれ 守護神 ぼん てん 梵天
梵天は仏教の創造神。あなたは梵声（ぼんじょう）の力で声に靈性を宿し、場を整え現実を動かす能力を秘めています。発する声の響きを正しく用いれば周囲を調和させ自己と縁者を開運へ導きます。



3月 生まれ 守護神 び しゃ もん てん 毘沙門天
毘沙門天は四天王の一尊。あなたは普段は静かでもスイッチが入ると爆発的な集中力と行動力を解放できる能力を秘めています。点火の瞬発力で一気に流れを呼び込み勝機を掴む開運型です。



2月 生まれ 守護神 たい しゃく てん 帝釈天
帝釈天は諸神を統べる天界の王。あなたは場の空気を読み、人間関係を整え開運へ導く能力を秘めています。無意識に場を調整し自分にとって居心地のよい場と関係網を生み出せる「影の采配者」です。



1月 生まれ 守護神 ぞう ちよう てん 增長天
增長天は四天王の一尊。あなたは逆境を力に変える能力を秘めています。困難に向き合うほど開運します。挑戦を恐れず歩を進めるほど成長と成果を得ます。周囲を鼓舞し仲間をまとめる力も発揮します。



法事祈願

妙輪寺では常時ご法事やご祈願を受け付けています。檀家ではない方の法務も喜んでお受けしています。

仏画師として海外でも活動している住職による妙輪寺のご朱印。あなたの守護神の魂をご朱印に込めます。

ご朱印



ペット葬儀

ペットのためのお葬式と火葬。大切な家族の一員であったペットの旅立ちを心を込めてお手伝いします。



授与所

妙輪寺で開眼されたお守りや仏像、仏画師である住職が書いたご朱印などオンラインにて授与しています。

開運のお寺 福聚山 妙輪寺

お葬式



妙輪寺では葬儀社ではなくお寺がお葬式を主導して本堂で行なう、荘厳かつ低費用な寺院葬をどなたにでもご提供しています。

「お墓が無い」「跡継ぎがいない」「寺の檀家にはなりたくない」そのような方々のために各種永代供養をご用意しています。



永代供養



平成三十年十月 初版発行
令和七年十月 二版発行

編集 妙輪寺七十代目 慈療院日吏
発行人

発行所 福聚山 妙輪寺

神奈川県中郡大磯町大磯一五八二
☎ 〇四六三一六一―〇七四九

<https://myorinji.com>

info@myorinji.com

妙輪寺公式
ホームページ

